

「木は地球を救う」 — 21

細田木材工業(株)
顧問 細田 安治

第39回「木と暮らしのふれあい展」

10月5日、6日の両日、木の祭典が木場公園で行われ大盛況であった。業界の皆様方の長年にわたる努力が実ったことを感謝し歴史を振り返れば、感無量の思いであります。

この木の日「木と暮らしのふれあい展」がどのような経過をたどり、現在の盛況を迎えることができたかを「おさらい」し、皆様のご参考に供すれば幸いです。

◇十月八日・木の日

木の日の始まりは昭和52年(1977年)第1回木の日で始まった。木の日「木」の字(十と八)とし「十月八日」を木の日と定めたのである。

◇未曾有の好景気

昭和45年には大阪万博の開催、新設住宅着工数(以下着工数とする)は昭和49年には190万戸となり、史上最大となった。そして、驚くなかれ、木造住宅着工戸数は昭和45年(1970年)103万戸となり、以後4年間にわたり昭和48年(1973年)まで100万戸台を維持、正に「木材や」の黄金時代であった。

◇第一次石油ショック

しかし、第4次中東戦争の勃発によって、我が国は、「石油がなくなるのでは」の恐怖感により所謂狂乱物価となった。昭和49年には、石油ショック(第一次)により景気は冷え込み、住宅着工戸数は前年比約7掛けの135万戸に激減した。

◇新木場移転

木場の「木材や」は昭和51年新木場に大挙移転した。昭和52年に狂乱物価がようやく終息したが、総需要抑制(狂乱物価抑え込み)政策が効き過ぎての反動で「木材や」は大不況となった。

◇お仕着せの木の日

昭和52年皇居前広場で林野庁と木材促進協議会の音頭取りで「木の日」が行われた。林野庁主催の「お仕着せの木の日」は昭和55年(1980年)の第二次オイルショックまで行った。

◇第二次オイルショック

昭和55年(1980年)第二次オイルショックが発生、物価高騰もすぐに不景気に入った。着工数は110万戸台を維持し1割減程度であったが、木造戸数は、更に3割ほど減り60万戸台となり惨憺たる有様であった。

◇木の需要喚起へデモ行進

この落ち込みは、大変な事態、「木材や」の存亡を問われるとの危機を感じたのは、需要の最先端の都内街場にある小売店様、仲買店様であった。木造住宅が10年足らず(8年)での数字は全国ベース約半分になった。データは手元にないが、半減以下と推測する。

もともと木造住宅は、昭和36年の建築基準法の改正（木材屋の対場では改悪）によって木材を使わせないようにした。（された）都会や街場では、さらに消防法などの規制があり規制されている。木造住宅着工が激減、このままで「座して死を待つより、行動して道を切り開こうと」と日比谷公園に集結した。

◇第1回木の日の祭典

都木連が音頭をとり、全木連の応援を得、東京都経済局を動かし、都内の各協組^{きょうぐみ}に呼びかけて「木の日」として行動を開始した。昭和56年10月8日でこれが実質的な「木の日」始まりである。式典のなかで、竹田平八全木連（3代目）会長の挨拶で、「雨降りのなか、ご苦労様、一雨ごとに木は育つ、雨は恵みの雨として頑張りましょう。」と挨拶された。この言葉でデモ隊は元気づけられたことを記憶している。

この時日比谷公園に集結した人数はいかほどであったか、記録がないのが残念だ。都木連にこの数字が残っているか後日確認し報告いたします。

◇トラックに丸太を積んで銀座通りへ

日比谷公園から銀座通りを新橋で戻り、日本橋から神田を通過して千葉街道（靖国通り）を西へ進み九段下で解散した。「木を使おう」「木の家に住もう」「木は健康にいい」「木は生活に潤いを」などなどのスローガンを連呼し雨の中を「デモ」した。沿道では道行く人が足を止め、トラックに積んである「皮付き丸太」を見て、こんな大きな木は見たことがない。「何という木」「重さは何トンか」「この木で家が何軒出来るのか」様々な質問がでた。とにかくこの丸太は樅^{びら}で、東京新木場木材商工協同組合の理事長会社の「出品」と記憶している。

デモ行進の成功での教訓は、「大勢の力は大きい」「一人では何もできない」と話されていたのは某市売り問屋の理事長の言葉である。

◇日比谷公園開催

その後昭和61年（1986年）バブル発生、平成2年（1990年）崩壊までの4年半は、バブル景気に惑わされ、「デモ行進」のような運動は立ち消え、その後日比谷公園で何回か開催したが人が集まらず、落語家呼び木のPR話をさせたが効果はなかった。

その後、運動も低調化し会場は芝公園などで細々と続いていた。参加者も少なく筆者も参加できなかった。

ここでの教訓、好況時ほど、不況時を想定し運動を強化すべし。良くなれば手を抜く運動は、線香花火と一緒に効果なし。日本人の特性か、一寸良くなると有頂天になり需要喚起運動は手を抜く。その上で日本人の熱し易く、冷め易い気質が加わったのではないか。

◇東京都庁のイベント広場

平成3年（1991年）から平成6年（1994年）まで、東京都庁のイベント広場で開催したが、日比谷公園よりも人が集まらず効果がなかった。工夫が足りないのか？

◇木場公園で開催

平成7年（1995年）から、江東区民祭りと共催で行ったが、区民祭りの角乗などに人が集まり他力本願ではよくないことが判った。

◇都木連が主体

平成16年（2004年）都木連が音頭取り、東京都経済局、林野庁の後援を得て都内各協組団体が一丸と

なってイベント広場を借り切り、テントを張り巡らし木材のPRを始めた。いよいよ本腰を入れて、木の需要開拓に乗り出さねばと本気になって動き出した。苗木の無料配布、落とし(副資材・木片)の無料配布などを行ったが、今一つであった。

◇木のワークショップ

ここに登場したのが工作である。子供たちが自分で鋸を使い、木を好きな長さに切る。鉋で削ると美しい木の木目が現れる喜びの発見、自分でトンカチを持ち、釘を打つ。自分の好きなものができる。この未来を担う子供たちが、木の日に、木を使い、自分で自分用の木の箱を作る。この喜びは正に究極の木のPRではないかと気がついた。しかも、使う材料は、「木材や」の副製品の副製品、所謂「落とし」である。そのままでは林場の肥やし、デッドストックである。最後は、チップにするか、燃やしてしまうか、捨てるしかないのが落としである。この落としを使って木をワークショップ化し、子供たちに夢を与え木の良さを伝え需要を創造する。子供たちにとってこんな楽しいことはない。「木材や」にとっても素晴らしいアイデアだ。業界が直接消費者に、木の良さを訴える場となるのである。木材業界最大の「イノベーション」と存じますが読者の皆様の“ご意見は如何でございましょうか。”“ご批判は頂けますでしょうか。”よろしくお願い申し上げます。

◇最初には決めた勇気と決断

最初に始めたのは下町の小売商K様である。落とし材を鉋掛けし、寸法を定尺寸法に切り落とし、釘を打てば、直ぐに好きな工作物ができる様用意した。当初は珍しいので子供よりも大人が手を出して工作していた。しかし、他の組合、業者はまだそこまでの行動を起こすには至っていなかった。失礼だが当初は1社のみで、面白い、珍しいレベルであった。このときの入場者は3万人と記録されている。

◇会場全体がワークショップ

しかし、これが引き金になり、ワークショップは、数年後には広場を埋め尽くすほどの賑わいとなった。木材業界のイノベーション大成功である。

この時点での入場者は7万人と聞いている。今となれば、「木材や」は挙って「落とし」と工作道具(鋸、鉋、トンカチ、釘、のり、ペンキなど)を揃え、来場者に作り方を教えながら、何も言わなくても、木の良さが伝わっている。親子連れは、親子一緒になって何かを作る共同作業、この忙しい世の中、親子のコミュニケーションが「ワークショップ」によって、微笑えましいことである。

ここで、ワークショップの盛況は、当初一人で始めた勇気と決断であることを強調しておきたい。

◇まとめ

木の日の歴史は、

昭和52年(1977年) お仕着せ行事でスタート、だれも見向きもしない

昭和56年(1981年) 第1回 本気でデモ行進、1回だけ

昭和61年(1986年)～平成2年 バブル期 それどころではない

平成3年(1991年)～平成6年 東京都庁イベント広場、誰も見に来ない

平成7年(1995年)～平成15年まで、江東区民祭りと共催、他力本願は通用せず

平成16年(2004年)～平成18年まで、ワークショップ初期の頃、個人では限界

平成19年(2007年)～平成23年まで、ワークショップ団体? 未だ定着入場者3万人

平成24年(2012年)～ワークショップ大盛況、入場者7万人

令和元年(2019年)第39回現在

◇スタートから半世紀余り

物事を成し遂げるには、半世紀の時間が必要となる。しかし時代の変化は恐ろしいほど早く、業界の変化を待ってくれない。次は何をすべきか。業界あげて知恵を集め次の答えを見つけなければならない。

◇文中

お名前などのご紹介で失礼な点あるかと存じますが、ご寛容下さいますようお願い申し上げます。

具体的に発生年度を明記したが、統計数字は所轄官庁の統計、全木連、都木連からの聞き取り、筆者の記憶などを頼りに記した。間違いがあったらご指摘、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



「第39回木と暮らしのふれあい展」風景